

岐阜県博物館 調査研究報告

第40号

2019・2020
岐阜県博物館

岐阜県博物館調査研究報告

第 40 号

BULLETIN

OF

THE GIFU PREFECTURAL MUSEUM

No.40

岐 阜 県 博 物 館

GIFU PREFECTURAL MUSEUM

1989 Oyana, Seki City, Japan

March, 2020

目 次

調査研究実績 1-2

岐阜県立多治見工業高等学校所蔵の近代陶磁器資料について
一年号が付記された製品を中心に— 3-11
立花 昭

青木啓将著『現代日本刀の生成』書評に代えて 刀剣鑑賞と「刀の世界」ウチソト
..... 13-19
南本有紀

購入資料紹介 秀吉文書について (1)-(5)
山田昭彦

Contents

The results of the research 1-2

Modern ceramics as reference material collected by Tajimi Industrial High School
— Focusing on items with labeled information of production year
..... 3-11
TACHIBANA Akira

Book Reviews: AOKI Hiroyuki, “Generation of Japanese Sword in Contemporary Japan”
Or Study on Japanese Sword Appreciation and Appraisal Terms
..... 13-19
MINAMIMOTO Yuki

Introduction of purchase historical sources
— A Focus on Hideyoshi monjo (Hideyoshi documents) —
..... (1)–(5)
YAMADA Akihiko

調査研究実績

論文等

【自然分野】

- ・ 説田健一，2019. 学校標本を産業史の資料として活用するための視点—明治から昭和初期（戦前）までの標本販売業の変遷（特集 学校所蔵標本のこれまでとこれから）. 博物館研究54(12)：6-9.
- ・ 石垣忍・高津翔平・真加部智大…能美洋介，2020. 「足跡化石記録手法の発展と3-D技術」化石研究会会誌 52（2），pp. 54-63.

【人文分野】

- ・ 長屋幸二，2020，「名古屋市天白区菅田遺跡採集の細石刃等の資料について」『東海石器研究』第10号 東海石器研究会
- ・ 立花昭，2019，「大倉陶園で製造された初期陶彫について」『華めく洋食器 大倉陶園100年の歴史と文化』pp. 234-244，岐阜県現代陶芸美術館
- ・ 立花昭，2019，『神業ニッポン 明治のやきもの 幻の横浜焼・東京焼』求龍堂（分担執筆）
- ・ 立花昭，2019，「横浜絵付の諸相」『神業ニッポン 明治のやきもの 幻の横浜焼・東京焼 論考集』pp. 56-68，神奈川新聞社
- ・ 立花昭，2020，「加藤土師萌による欧米の旅について2 —ヨーロッパ・アジア歴訪—」『岐阜県現代陶芸美術館研究紀要』第4号，pp. 1-45 岐阜県現代陶芸美術館

学会発表等

【人文分野】

- ・南本有紀，2019. 11. 30 「地域研究からみた『現代日本刀の生成』」中部人類学談話会中部地区研究懇談会第251回例会・公開シンポジウム「現代日本刀の生成―刀都・関の刀の世界」名古屋大学
- ・社会科・歴史教科書等検討委員会（松本建速 長屋幸二ほか）2019. 10. 27 「学校教育と考古学（その3）―各地の教育実践の紹介ほか―」日本考古学協会岡山大会ポスターセッション 岡山大学
- ・長屋幸二，2019. 09. 28 「石鏃の製作者」東海石器研究会 愛知県刈谷市

岐阜県立多治見工業高等学校所蔵の近代陶磁器資料について

—年号が付記された製品を中心に—

立花 昭

Modern ceramics as reference material collected by Tajimi Industrial High School

- Focusing on items with labeled information of production year

TACHIBANA Akira

要旨

岐阜県博物館では、岐阜県立多治見工業高等学校所蔵の陶磁器資料37点を保管しており、このうち9点は江戸後期から明治時代に製作されたものである。筆者は、平成22年に公益財団法人ポーラ美術振興財団の助成を得て、同校所蔵の約1,600点におよぶ近代陶磁器資料の悉皆調査をおこない、報告書を作成した。しかし、調査対象の範疇にある当該保管資料は、そこに含まれていない。よって、この資料を追捕するとともに、前回の調査で重要性を明らかにした、年代のラベルを伴う製品が新たに5点確認されたため、これらを含めて資料の意義を再検証する。

はじめに

明治政府は近代的な産業に従事し得る者の教育のため、明治27年(1894)に実業教育費国庫補助法を施行し、これを契機に全国各地で工業学校をはじめとする実業学校が開校していく。岐阜県立多治見工業高等学校¹の前身となる岐阜県陶磁器講習所も、こうした流れを受けて明治31年(1898)に創立し、美濃焼産業の近代化に大きく寄与するものとなった。

同校では、設立時から戦中にかけて教員や生徒の制作に資するよう、国内外で作られた陶磁器の参考品が収集されており、今日のようにカラー図版の書籍などが普及する以前において、重要な役割を果たしていた。こうした参考品やそれらに基づいて作られた試作品については、平成22年(2010)に公益財団法人ポーラ美術振興財団の助成を得て、同校の協力のもと筆者が共同研究者代表となって悉皆調査をおこなっている。その結果、約1,600点の製品を確認し、これに関する報告書²を作成して全容を示した。

ただし、同校所蔵の陶磁器の一部が昭和51年(1976)より岐阜県博物館で保管されており、先の調査から漏れていたことが判明した。このうち、江戸後期から明治時代の陶磁器製品は9点を数え、資料の総数からすれば決して多くはないものの、後述する年号が記されたラベルを伴う製品(以下「年号資料」という。)も含まれていたことが注目される。よって本稿では、当該資料を追捕し、さらにこの年号資料について、新たに確認された製品と既存のものを併せながら改めて検証していくこととする。

博物館で保管された近代陶磁器

この保管にいたる経緯については判然としないが、岐阜県博物館の開館が昭和51年5月5日、保管の開始が同年3月24日であることから、博物館のオープンを機におこなわれたことは明らかである。全9点(図1, 図5, 図15, 図20, 図26, 図27-30)の内訳について、産地は美濃産8点、肥前産1点、時代は近世(江戸後期)2点、近代(明治)7点、器種は徳利3点、鉢類2点、蕎麦猪口・煎茶碗2点、洋食器(カップ&ソーサー)2点、絵付技法は手描き6点、摺絵1点、銅版転写2点、そして年号資料は5点であり、報告書に掲載された資料群との乖離はみられない。これらを踏まえると、近代の美濃における代表的な窯を営んだ西浦圓治(五代1856-1914)と加藤五輔(1837-1915)の製品を含めながら、器種や技法などが分散するように考慮して選択されたようである。そして年号資料については、割合からみて意識的に選んだ可能性も考えられる。

年号資料について

同校所蔵の年号資料は、今回確認した5点と、報告書に掲載された94点にのぼり、すでに以下の点について言及している。

- ・ラベルに記された年号は、貼付されている製品の製作年を示しており、信憑性が高い
- ・いずれも美濃焼製品である
- ・陶器商だった加藤助三郎(1856-1908)によって収集され、同校に引き継がれたものである
- ・製品の選定にあたっては無作為に抽出するのではなく、

多くの場合、例えば革新的な技法が確立した直後にそれを使って製作されたものなど、何らかの理由に基づいて意図的に選んでいたようである

上記を踏まえながらこの年号資料を改めて評価すれば、通常、紀年銘資料³を除くと量産品の正確な製作年を知ることは難しいため、非常に有益な情報が個別に得られたといえる。そのうえで全体を俯瞰することにより、美濃焼の意匠や技法の年代的な変遷を辿ることも可能となる。さらには、このような資料群は全国的にみても稀であり、極めて貴重な存在として位置付けられる。

なお、これら年号資料の収集については上記のとおり、学校が主体的におこなったのではなく、現在の多治見市市之倉出身で、陶器商として手広く商売し、同校の設立にも尽力した加藤助三郎⁴が関わっていた。その根拠として同氏の履歴書⁵に、「明治三十八年五月長崎宮内省調度課長視察トシテ来店サレタルニ付明治元年ヨリ全三十八年迄毎年ノ美濃焼ヲ観覧ニ供シテ其進歩ヲ説明シ」、さらに「同年同月明治元年ヨリ全三十八年迄毎年美濃焼標本土岐郡立陶器学校ノ需ニ依リ取り揃ヘテ送ル」と具体的に記述されている。

以下に、年号資料のなかから今回の製品と調査済みの主要なものを取り上げ、改めて美濃焼の技法的な進展について、近年の新たな見解なども加味しながら順に記すこととする。

染付山水文蕎麦猪口（明治元年，図1）

博物館保管。美濃では文化・文政年間（1804-17, 1818-29）頃、新たに磁器の焼成が可能となるものの、器形や文様は一日の長のある肥前磁器を踏襲していた。本作や「染付雲気文奈良茶碗」（明治元年，図2）、「染付矢筈文蕎麦猪口」（明治2年，図3）より、明治初期にいたっても肥前磁器のスタイルが暫時、継承されていた様子が窺える。この時期の染付にも前代より引き続き山呉須が使用されており、やや黒味を帯びた色合いを呈している。

染付草花文盃（明治5年，図4）

青色の草花文様は、この当時美濃で一般的だった染付ではなく、器面に対してやや凸となった特殊な加飾技法による上絵付で描かれている。これは、猪口絵といわれるもので、器面に接着液で絵を描いたのち、ガラス質の青粉を振り掛けて装飾した⁶といわれる。江戸から明治にかけて土産物の絵付けに多用されており、シーボルトのコレクション⁷などにも江戸絵付けによる同技法の盃がみられる。

染付草花文徳利（明治6年，図5）

博物館保管。頸部に一段設けた徳利で、胴部に染付で草花を描いている。同型の「白磁徳利」（明治6年，図6）も存在していることから、収集時に一对で取り揃えられた可能性が高い。当時の美濃製品の加飾は染付が主流であったが、これとは別に白素地のまま出荷され、東京などで上絵付けされることもあった。年号資料のなかにも白素地が複数みられるように、この頃、相当数の供給がなされていた。

染付蝙蝠文煎茶碗（明治8年，図7）

染付によって蝙蝠が描かれたもので、中国では蝙蝠の「蝠」は「福」と音が通じることから吉祥文とされている。この頃から染付の発色が濃く鮮明になっており、山呉須に代わって酸化コバルトが使用されたことがわかる。肥前・有田の松村九助は、明治7年（1874）に輸入品の酸化コバルトを大量に買い占め、その後、名古屋を拠点に美濃や瀬戸などに売りさばっていた。本作は、この絵具が量産品の染付に汎用されていくことを証するものといえる。

青磁花籠文小皿（明治10年，図8）

伝統的な青磁の技法を用いたものでなく、酸化クロムの呈色によるため若草色の明るい色味となっている。酸化コバルトが美濃に伝わった経緯は先述のとおりであるが、酸化クロムについては現在のところ判然としない。ただし、酸化コバルトの導入後わずかな期間で使用され始めたことがこの製品から明らかとなった。年号資料には、「青磁煎茶碗」（明治13年，図9）、青磁富士山形皿（明治29年，図10）、青磁馬文小皿（明治38年，図11）など各時期に酸化クロム青磁の製品が認められる。そして、消費地でも例えば東京都品川区の妙国寺北遺跡から出土した近代陶磁器⁸では、染付製品に次いで多くみられることにより、一定量の需要があったといえる。なお、器面の花籠などには白泥による花卉や、緑、黒の上絵付が施されており、年号資料のなかで同種の上絵付は初出となるが、実際は、多治見でそれ以前の明治初年頃よりおこなわれていたとされる。

染付草花文徳利（明治15年，図15）

博物館保管。染付によって胴部の上半分に草花を、その下に間道文風の文様を描いている。年号資料のなかで徳利は時期を選ばずに登場する器種であり、本資料と「染付山水文徳利」（明治10年，図12）、「染付草花文徳利」（明治12年，図13）、染付山水文徳利（明治15年，図14）などを比較すると、文様の簡略化される様子などがよくわかる。手描きの絵付けをおこなうには、ある程度の熟練が必要で、さらに個々の技量の差が生じるため大量生産には向かず、美濃ではこれ以降、絵付けにおける量産

のための技法が次々と確立されていくこととなる。

摺絵染付雲鶴文德利（明治16年，図16）

染付による文様が従前の手描きに代わって、染色の捺染を応用した摺絵の技法を用いて加飾されたもの。近代における摺絵は明治15年（1882）頃、現在の多治見市脇之島の上田幸右衛門が伊勢・白子から型紙職人の長谷川久之助ら3人を招聘して型紙を作らせたことが始まりとされる。本作は、この技法が伝わった直後に作られたものであり、初期の作ながら稚拙さは感じられない。

白磁カップ（明治15年，図17）

エッグシェル（卵殻手）といわれる薄手のカップで、鑄込みによって成形されている。この技法自体は明治6年（1873）のウィーン万国博覧会に随行した納富介次郎ら伝習生によって国内に伝えられており、美濃では同17年（1884）に現在の土岐市妻木町の水野勘兵衛が伏せ焼による薄手の白磁カップを完成させたことが知られている。幕末以降、ジャポニスムの影響で花瓶などの美術品や調度品が数多く輸出されるなか、この頃になると下火となりはじめ、買い替え需要のある洋食器にシフトすべきとされた時期に当たる⁹。

銅版染付小皿（明治21年，図18）

下絵銅版転写については、明治21年（1888）に現在の土岐市土岐津町高山の深萱惣助らが、京都でこの技術を研究していた五十嵐健二を招いて試みたが完成をみずに中断。さらにその年、多治見の加藤元次郎、加藤米次郎らがこれを聞いて、名古屋から銅版彫刻師を招き、後に岐阜県陶磁器講習所の嘱託講師となる太田能寿とともに完成させた。本作も摺絵のときと同様に技法の完成直後の作であり、絵付けのクオリティは高い。なお、この技法は明治21年に、太田能寿と加藤元次郎の連名によって特許が出願されており、翌年に特許第773号の「転写紙」に関するものとして取得された¹⁰。

赤絵銅版花筏文小皿（明治28年，図19）

上絵（赤絵）銅版転写は、下絵銅版転写の技法を上絵付に応用したものであり、明治28年（1895）に多治見の加藤小三郎が考案した。本作についても技法の完成時と重なり、なおかつ器面にみられる「多東舎」は、加藤小三郎の窯の屋号を示していることから、本人の作であることが確認できる。

染付花鳥図德利（明治28年，図20）

博物館保管。轆轤成形ののち胴部を8つに面取りしており、円筒形以外のヴァリエーションが増えた。このころには、摺絵に代わって銅版転写による絵付けが主流と

なっている。ただし、量産化が進むにつれて粗製品も目立ち始め、初期の銅版の絵付けに比べ、繊細さに欠ける面もある。

釉下彩東下り図德利（明治33年，図21）

青、黒、ピンク、黄の4色からなる釉下彩によって絵付けされた德利。美濃においてこの頃、西浦圓治が釉下彩を用いた作品を作り始めたことが知られている。これは当時最先端の絵付け技法であり、東京の加藤友太郎（1851-1916）や井上良斎（二代1845-1905）、横浜の宮川香山（初代1842-1916）らも相前後して自身の制作に取り入れていた¹¹。また、海外ではデンマークのロイヤル・コペンハーゲンなどが手掛けて¹²、万国博覧会を舞台に洋の東西で鎊を削る状況となっていた。ちょうど岐阜県陶磁器講習所の開校直後の時期に当たり、同校でも研究していたことが試作品などからわかる。当初は特別な技法であったものの、次第に汎用されていく様子が、「釉下彩同心円文奈良茶碗」（明治38年，図22）、「釉下彩彩鶴図湯呑」（明治41年，図23）、草花文小鉢（明治43年，図24）などから見て取れる。

石版赤絵人物図小皿（明治34年，図25）

明治34年（1901）に多治見の小栗国次郎が石版転写を実用化し、その直後に作られたもの。平版による石版印刷を応用しており、写真風の絵付けも可能とした。ただし、摺絵から漸次銅版転写へと移行したときのような状況はみられず、その後も銅版転写は昭和前期を通じて主流をなしていた。

銅版染付スープカップ&ソーサー（明治35年，図26）

博物館保管。コーヒークップと異なり、ハンドルが一对をなすスープカップとそのソーサー。銅版転写によって唐草の輪郭を描き、その内側に手描きで濃淡のダミを施している。また、高台内も銅版染付で「西浦製陶所造」銘を有しており、当時、高級品とみなされていた西浦焼であることがわかる。同窯の絵付けは一般に手描きを主体としているが、本作のように輸出用洋食器の需要に応えるべく銅版転写を用いて効率化を図っていた。

おわりに

ここで取り上げた近代陶磁器資料は、「タイムカプセルによって現代に伝えられたものである」と、かつて述べたことがある。参考品や試作品としての役割を終えた多くの陶磁器は、近年にいたるまで、長きにわたり学校の倉庫の片隅で埃をかぶって保管されていたためである。この存在は、一部の教員以外には知られておらず、当然、顧みられることはなかったと考えていたが、少なくとも岐阜県博物館の開館時には、展示資料になり得る

との認識がもたれていたことが新たにわかった。

そして、1,600点を超える陶磁器資料のなかでもとりわけ重要な意味を持つ年号資料については、報告書の刊行後に各所で展示され、図録等に取り上げられることもあり、さらには近代遺跡の発掘調査担当者から問い合わせを受けるなど注目度は増している。このような状況下で、今回5点の新たな年号資料を追加できたことにより、近代における美濃焼の生産状況がより鮮明になったといえるだろう。

参考文献

『多治見市史 通史編下』多治見市，1987年

註

¹ 岐阜県立多治見工業高等学校は、明治31年（1898）に岐阜県陶磁器講習所として現在の土岐市土岐津町に創立し、同33年（1900）土岐郡立陶器学校、同41年（1908）岐阜県土岐郡立陶器工業学校に改称、大正2年（1913）多治見に移転し、同12年（1923）岐阜県土岐窯業学校、翌年に岐阜県多治見工業学校、そして昭和23年（1948）に現在の校名となった。

² 『公益財団法人ポーラ美術振興財団 平成22年度調査研究助成事業 岐阜県立多治見工業高等学校所蔵の近代陶磁器資料の調査研究』研究代表者 立花昭、佐野素子、手島敦，2011年

³ 陶磁器の場合、製作年を成形時に直接刻んだり、絵付けの際に記す場合が多い。

⁴ 加藤助三郎は現在の多治見市市之倉に生まれ、美濃や東京などを拠点とした陶器商。明治5年（1872）に16歳で東京深川に陶磁器卸販売店を開業、同10年（1877）には同業者と東京・日本橋に濃栄社を、同22年（1889）満留寿の名を継承して京橋に陶磁器卸問屋を設立。海外輸出への販路開拓、陶磁器の鉄道輸送などを積極的に推し進めるとともに、岐阜県陶磁業組合長や東京陶器問屋組合会頭を歴任。岐阜県陶磁器講習所の設立の意見書を県や郡に送り、開校のきっかけもつくった。

⁵ 加藤助三郎が緑綬褒章を受けるため、明治40年（1907）3月に作成された履歴書の控えが残されている。

⁶ 高木典利「東京の陶磁器」『近代陶磁』第20号，近代国際陶磁研究会，2019年，p. 16

⁷ 『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』青幻舎／国立歴史民俗博物館，2016年，p. 120には、フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト（1796 - 1866）の残したコレクションのうち、美濃産とされる素地にこの絵付けによる「金地藍彩日本名所図盃」が掲載されている。

⁸ 『妙国寺北遺跡 一品川区立城南小学校校舎改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』品川区教育委員会／国際

文化財株式会社，2019年

⁹ 花井久穂「＜美術品＞から＜日用品＞へ ー明治十八年繭糸織物陶漆器共進会ー」『近代陶磁』第10号，近代国際陶磁研究会，2009年，pp. 9-11

¹⁰ 独立行政法人工業所有権情報・研修館 特許情報プラットフォームより

¹¹ 立花昭「日本における釉下彩について 高火度顔料を中心に」『魅惑の北欧アール・ヌーヴォー 塩川コレクション ロイヤル コペンハーゲン・ビング オーグレンダール』岐阜県現代陶芸美術館，2011年，pp. 156-158

¹² 塩川博義「パリ万国博覧会を魅了した高火度磁器の釉技「多色の釉下彩」と「結晶釉」『アール・ヌーヴォーの装飾磁器 ヨーロッパ名窯 美麗革命！』岐阜県現代陶芸美術館，2015年，pp. 10-13

図版凡例

各作品のキャプションは、番号、製品名、産地（国、地域）、製作年、サイズ（H＝高さ、MD＝口径、FD＝高台径）の順に記した。



図1 染付山水文蕎麦猪口
日本 美濃 19世紀後期(明治元年)
H: 5.9 MD: 7.2 FD: 5.1



図2 染付雲気文奈良茶碗
日本 美濃 19世紀後期(明治元年)
H: 6.8 MD: 10.5 FD: 3.8

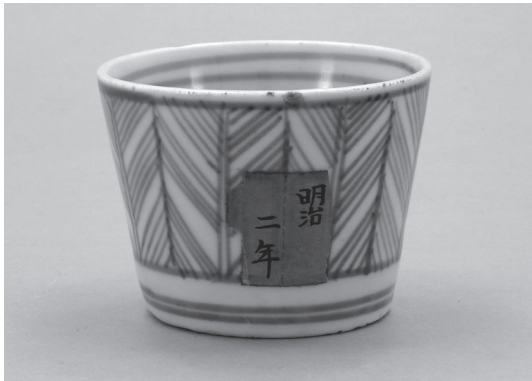


図3 染付矢筈文蕎麦猪口
日本 美濃 19世紀後期(明治2年)
H: 5.3 MD: 6.9 FD: 4.9



図4 染付草花文盃
日本 美濃 19世紀後期(明治5年)
H: 2.8 MD: 6.2 FD: 2.5



図5 染付草花文徳利
日本 美濃 19世紀後期(明治6年)
H: 17.4 MD: 3.2 FD: 5.5



図6 白磁徳利
日本 美濃 19世紀後期(明治6年)
H: 17.1 MD: 2.7 FD: 5.7



図7 染付蝙蝠文煎茶碗
日本 美濃 19世紀後期 (明治8年)
H:4.5 MD:5.9 FD:3.3



図8 青磁花籠文小皿
日本 美濃 19世紀後期 (明治10年)
H:1.7 MD:11.4 FD:6.2



図9 青磁煎茶碗
日本 美濃 19世紀後期 (明治13年)
H:5.3 MD:8.6 FD:3.7



図10 青磁富士山形皿
日本 美濃 19世紀後期 (明治29年)
H:3.1 MD:16.8×17.0 FD:7.9



図11 青磁馬文小皿
日本 美濃 20世紀前期 (明治38年)
H:2.9 MD:13.9 FD:7.6



図12 染付山水文徳利
日本 美濃 19世紀後期 (明治10年)
H:18.3 MD:3.1 FD:5.9



図13 染付草花文徳利
日本 美濃 19世紀後期(明治12年)
H:18.3 MD:2.9 FD:5.7



図14 染付山水文徳利
日本 美濃 19世紀後期(明治15年)
H:17.2 MD:2.3 FD:5.2



図15 染付草花文徳利
日本 美濃 19世紀後期(明治15年)
H:18.4 MD:3.2 FD:5.9



図16 摺絵染付雲鶴文徳利
日本 美濃 19世紀後期(明治16年)
H:17.7 MD:2.7 FD:5.9



図17 白磁カップ
日本 美濃 19世紀後期(明治15年)
H:4.9 MD:9.3 FD:4.1



図18 銅版染付小皿
日本 美濃 19世紀後期(明治21年)
H:1.5 MD:7.6 FD:4.6



図19 赤絵銅版花筏文小皿
日本 美濃 加藤小三郎 19世紀後期(明治28年)
H:2.2 MD:12.2 FD:7.4



図20 染付花鳥図德利
日本 美濃 19世紀後期(明治28年)
H:18.4 MD:2.8 FD:5.7



図21 釉下彩東下り図德利
日本 美濃 暉秀 19世紀後期(明治33年)
H:18.1 MD:2.8 FD:6.0



図22 釉下彩同心円文奈良茶碗
日本 美濃 20世紀前期(明治38年)
H:7.1 MD:11.4 FD:3.7



図23 釉下彩松鶴図湯呑
日本 美濃 芳山 20世紀前期(明治41年)
H:8.5 MD:7.5 FD:5.0



図24 草花文小鉢
日本 美濃 20世紀前期(明治43年)
H:4.4 MD:12.0 FD:5.8



図 25 石版赤絵人物図徳利
日本 美濃 20世紀前期(明治34年)
H:2.0 MD:8.2 FD:4.9



図 26 銅版染付スープカップ&ソーサー
日本 美濃 20世紀前期(明治35年)
H: 5.1 MD: 9.6 FD:4.2 (カップ)



図 27 染付煎茶碗
日本 美濃 19世紀前期-中期
H: 5.6 MD: 6.5 FD:3.5



図 28 摺絵染付鉢
日本 美濃 19世紀後期
H: 7.4 MD: 25.1 FD:14.0



図 29 染付菊花文カップ&ソーサー
日本 美濃 加藤五輔 19世紀後期
H: 5.6 MD: 9.3 FD:4.6 (カップ)



図 30 染付鉢
日本 肥前 18世紀中期-後期
H: 3.6 MD: 14.1 FD:9.4

青木啓将著『現代日本刀の生成』書評に代えて 刀剣鑑賞と「刀の世界」ウチソト

南本有紀

Book Reviews: AOKI Hiroyuki, “Generation of Japanese Sword in Contemporary Japan”
Or Study on Japanese Sword Appreciation and Appraisal Terms

MINAMIMOTO Yuki

要旨

青木啓将著『現代日本刀の生成』（言叢社、2019）刊行に合わせて開催されたシンポジウムにおける同書の地域研究における位置づけをまとめた発表を採録する。同書は、関市等で実施されたフィールドワークをもとに現代日本刀の諸相について記した民族誌であり、文化人類学における物質研究である。本稿では同書の内容を紹介し、同書が取り上げた現代日本における日本刀・現代刀匠に関する諸論点を挙げ、とくに刀剣鑑賞について考察した。

はじめに

日本人ならば誰もが日本刀を知っている。知っているだけでなく、あのすらりとした独特の形状を正確に思い浮かべ、多種多様な刃物の中から選り分けることができるに違いない。しかし、そのうちどれほどの人が「日本刀の美（見どころ）」を知っているかという心もとなくはないだろうか。仮に、刀と太刀を見分けたり、数振の脇指の差異を指摘したりすることができるだろうか。

日本人の鼻祖目なしで日本刀は美しいし、かっこよい。オンラインゲーム「刀剣乱舞-ONLINE-」（2015年1月14日配信スタート）の「刀剣男士」が大人気になる前から、日本刀は「イケメン」であった。しかし、昨今の刀剣ブーム以前には、日本刀は難解で、刀剣の世界は限られた人に秘匿された状況にあった。今もそうかもしれない。ここ数年来、博物館業界では空前の日本刀ブーム¹で、通年ここかしこで刀剣展が開催され、鑑賞の機会が増えている。それでも、独特の刀剣鑑賞用語（後述する）を理解する人はまだまだ少数派だし、誰もがその美を分かち合っているわけではない。

この近くで遠い日本刀の世界をフィールドワークし、現代日本における刀剣生成の場を取り上げたユニークな民族誌を書き上げた文化人類学者がいた。急逝した彼と業績を偲ぶ催しが開催され、発表者のひとりとして参加する機会を得たので、その著書とシンポジウムのような報告し、併せて、知られざる日本刀鑑賞の世界を紹介したいと思う。

1 『現代日本刀の生成』について

さて、本稿の端緒となった青木啓将『現代日本刀の生成 物証性をめぐる人類学的研究』（言叢社、2019年）は、著者が名古屋大学大学院に提出した学位請求論文「物質性をめぐる人類学研究 日本刀の事例における製作、意味の生成、社会関係を中心に」を書籍として出版したもので、目次は以下の通りである。

序章

- 1章 日本刀事始め
- 2章 日本刀の受容の近現代史
- 3章 日本刀の生産と流通
- 4章 日本刀の鑑賞
- 5章 鑑賞美の規則
- 6章 実用性に対する認識と「科学」との出会い
- 7章 日本刀を想う
- 8章 日本刀を創る

終章 結論と今後の課題

本書および元になった博士論文の内容と学術的意義については、本書あとがきで著者の指導教員のひとりであった佐々木重洋氏が要領よくまとめておられるので参照願いたい。ここで簡単にまとめておくと、本書は、現代日本社会における日本刀の製作と鑑賞の現場での参与観察をもとに日本刀の置かれた独特（著者はそれを「刀の世界」と呼んでいる）の位置／価値づけを考察した文化人類学における物質研究で、「刀の世界のウチとソト」の往還経験から人とモノの関係性の精緻な分析が試みられている。本書の探求は、後述するシンポジウムでは、アンドレ・ルロワ＝グーラン（1911-86）からアルフレ

ッド・ジェル (1945-97)、ティム・インゴルド (1948-) やダニエル・ミラー (1954-) 等の業績を参照しながらその深度と先進性を指摘された。

本書を撮要しておこう。本書は、岐阜県関市出身の文化人類学者である青木氏が関市を主なフィールドとして、製作と鑑賞から日本刀文化の生成について取り上げている。序章で日本刀と鍛冶の先行研究を要略し、併せて文化人類学における物質文化 (とくに芸術) 研究史を概観、続く第1～2章で日本刀の基礎知識から歴史、さらに受容史が約説される。第3章で現代刀の置かれた状況が述べられ、第4～5章で鑑賞、第6章で実用性と鑑賞美、その科学的アプローチ、第7章で神聖性が考察され、第8章で現代刀匠の新展開を取り上げ、終章で改めて日本刀を取り巻く独自の「刀の世界」を検討し、人とモノ (日本刀) の相互交渉について、物質性と感性の関係へと論点を昇華して締めくくっている。

序盤で、明治以降、現代までの日本刀史が総括され、とりわけ、軍刀生産や帝展 (帝国美術院展覧会) 出品を取り上げるユニークな視座は、美術としての日本刀として美術史²家にも参照されるべきだと感じた。その他、日本刀について考え得るさまざまな観点から熟思を重ねつつ、巻中、何度も繰り返されるのが、名刀とは、よい刀とは、という問いかけである。本書には、この正解のない問いに対して著書がフィールドで出会った区々の回答が随所で提示され、とりどりの刀剣観が印象的であった。

一読者としての素朴な感想をいうなら、法規的な制約³からフィールドワークが不十分にならざるを得ない日本刀製作よりも、鑑賞に関する論述こそ本書の白眉だろう。学芸員として刀剣展を担当する日本刀初学者である筆者が、日頃、直面する「刀の世界」の難しさが生き生きとしたフィールドノートに活写されていて感に堪えない。同時に、斯界の神秘的なまでの近寄りがたさを再認識した。仄聞するに、著者に代わって編集校正に当たった文化人類学者は未知なる用語と概念の氾濫に苦労したとか。私見だが、刀剣鑑賞の難解さは独特の鑑賞用語に多くを由来するし、そもそも刀剣愛好の仕方 (例えば、鑑賞/鑑定) は「部外者」には窺い知る機会がない。入札鑑定会に参加したことがない読者が、本書の記述だけで著者の意図を充分理解できたか、老婆心ながら心配になった。

日本刀見巧者によれば、よい刀は誰が見てもよく、その差は歴然としているという。確かに、誰もが認める名刀は存在し、よいとされている刀剣の評価が二転三転することはない。けれども、本書の潜考にもかかわらず、名刀を説明する簡単明瞭な言葉が見つからなかったのも事実である。

以上を受けて、本稿では、本書の行き届いた考察に屋上屋を架す愚を恐れながらも、本書の紹介を兼ねて、刀剣鑑賞について省察する。

2 公開シンポジウム「現代日本刀の生成」について

本稿は、青木氏著作に関するシンポジウムにおける筆者の紙上発表である。当該シンポジウムは中部地区研究懇談会 (中部人類学談話会) 第251回例会として企画され、遺著がなる過程での関係者 (インフォーマント等) を招聘し、本書の内容と学術的価値を振り返る一方、関市における日本刀の歴史と文化について理解を深める目的で開催された⁴。プログラム⁵は以下の通りである。

開会挨拶・趣旨説明 (佐々木重洋・名古屋大学)

関の日本刀文化 (関市・DVD 視聴)

刀都・関について (関伝日本刀鍛錬技術保存会⁶、
江西奈央美・関市観光課)

地域研究からみた『現代日本刀の生成』 (※本稿 3)

物質性と人類学研究 1 (後藤明・南山大学)

物質性と人類学研究 2 (大村敬一・放送大学)

コメント (赤松伸咲・刀匠)

閉会挨拶 (青木栄兒)

次節に筆者発表を摘録する。

3 地域研究からみた『現代日本刀の生成』: 刀剣鑑賞と「刀の世界」ウチソト

①地域における『現代日本刀の生成』の受容: 公共図書館の利用状況

本論に入る前に、本書に関する岐阜県内の公共図書館の動向を見ておこう。2019年11月現在、県内では5館 (岐阜県、岐阜市、大垣市、高山市、関市) に架蔵があり、うち3館は郷土資料として禁帯出のため具体的な利用状況が不明であったが、貸出可の高山市図書館では2019年7月に1冊を受け入れ、11月18日現在、貸出4回、同じく関市立図書館では5月に10冊⁷を受け入れ、計10回貸出されている。著者の出身地であり、フィールドとなった関市での一般の関心が高いことがわかる。

② 関と日本刀

関市は岐阜県美濃地方 (県南部) の中央部分、平成27年 (2015) 国勢調査⁸によれば人口重心がある、文字通り日本の真ん中に位置する、人口88,266人 (2020年1月現在)⁹、面積472.33km²の地方都市である。全国約790市町村の中で、人口なら上位4割、面積でいうなら上位2割にランクする¹⁰。広い面積のほとんどを山林が占める (森林率80.9%) 中山間地域だが、3S¹¹の一角を成す世界的な刃物産地¹²でもある。地場産業である刃物生産では包丁やカスタムナイフ、理髪用鋏、爪切り等の評価

が高い。

関の刃物製造¹³は中世に遡り、当時は剃刀などの打刃物で知られていたようである。美濃における作刀は西濃（西美濃）から始まり、関には南北朝頃に大和の刀鍛冶の技術が流入して、日明貿易（主要な交易品は東刀と呼ばれる数打ちの日本刀であった）の時代には中国地方と双璧を成す産地を形成した。この室町末期が関鍛冶の最盛期で300人を超す刀鍛冶がいたとされる。その後、関ヶ原合戦を経て、全国へ領地を広げた中部地方の武将が地元・関の刀工を伴ったことにより、江戸時代を通じて、美濃の刀鍛冶は全国に多大な影響を及ぼした。近世、各地に拡散した美濃（関）鍛冶は、明治期の日本刀鍛錬所および日本刀鍛錬塾を経て、再び関に作刀拠点、即ち、軍刀の量産基地をなして隆盛を極めた。昭和十年代、「刀都・関」と呼ばれた時期には、関に250人以上¹⁴もの刀工がいたのである。

終戦を経て人数は激減してしまったが、2016年に関市周辺で作刀する刀匠は関伝日本刀鍛錬技術保存会会員14人、元会員3人の計17人（うち全日本刀匠会東海支部所属12人）の刀匠¹⁵がいて、全日本刀匠会会員211人¹⁶に占める割合は8%、この数字は赤羽刀¹⁷に占める美濃刀の数値と等しい¹⁸。2019年11月現在の全日本刀匠会会員で見ると、最も多いのが岡山県18人で、次いで埼玉、福岡、東京と続き、岐阜は5位となっている。

③ 日本刀とは

日本刀の鑑賞について取り上げるに当たり、基本事項を確認しておく。まず、現代日本における日本刀は「武器」ではなく「美術工芸品」である。実用性は有する（実際に切れる）が、実戦に用いることは禁止されている。美術品として所有するに際しても、登録審査を経た登録が義務づけられている。合格するには、伝統的な原料（玉鋼）と製法（折り返し鍛錬）、形状でなければならない。つまり、日本刀とは伝統的な原料と製法による湾刀¹⁹である。鍛錬することで表面に独特の肌合いが生まれ、焼き入れによって特有の刃文が生じる。錆のある片刃が通例だが、それ以外の体状もあり、長さ（刃長）から太刀・刀、脇指、短刀に分けられる。

日本刀の鑑賞では、製作時期によって古刀（～関ヶ原合戦）・新刀（～江戸中期・明和年間）・新々刀（～幕末明治）に大別される。古刀は五箇伝（大和・山城・備前・相州・美濃）、新刀は七ヶ国（京・大坂・武蔵・尾張・越前・肥前・薩摩）が主な産地／作風である。

具体的にみていこう。写真1の2振は典型的な日本刀の形姿をしていて、一見して判別不能のようだが、子細に観察すれば、長さや反り具合、地鉄の色合い、刃文等が異なる。これは、作者と時代の違いが作風・形態の差

異となっているためである。

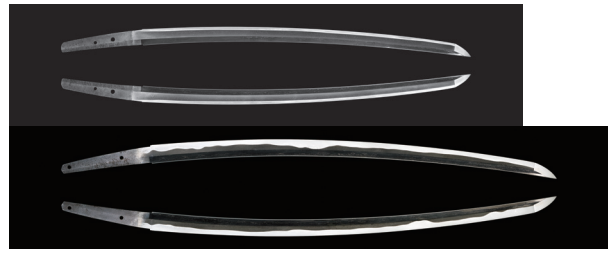


写真1 上：小太刀 銘 濃州関住人兼定 享徳三年二月日（岐阜県博物館蔵・中村慧撮像）、下：刀 銘 和泉守兼定²⁰ 作（関信用金庫蔵・中村慧撮像）

日本刀の鑑賞はこのような細かな部分の検討を積み重ねて行われる。ここまででも少なからぬ特殊用語が出てきたが、日本刀の鑑賞方法と鑑賞／鑑定用語は更に独特なものである。

④ 日本刀の鑑賞

日本刀鑑賞のひとつに入札鑑定がある。銘がある茎²¹を隠した状態で刀身を鑑賞し、作風から刀工を当てる遊戯性を加味した勉強法として江戸時代から行われている。

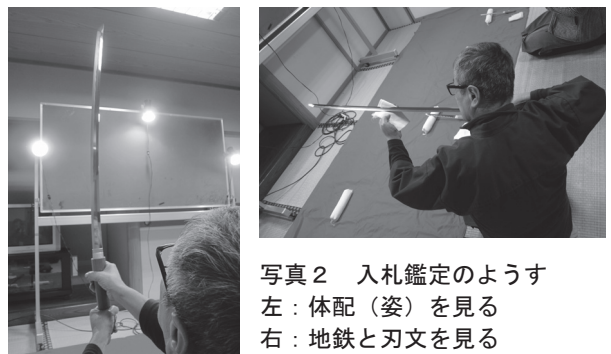


写真2 入札鑑定のようす
左：体配（姿）を見る
右：地鉄と刃文を見る

鑑定は次の手順で行われる。第一に、体配（姿）を見ることで時代を、第二に、地鉄（肌）を見て産地を、第三に、刃文を見て作者を判断する。前述のように製作年代が推定できれば、時代ごとの代表的な産地があるため、製作した刀工の見当がつく。このように段階的な指標によって該当する作風を特定していくことで刀工を確定するのである。

入札鑑定は、実物を手に取って行われるほか、刀剣専門誌の紙上入札もある。茎の銘を隠した押形（刀剣の拓本様の絵図）と次のような作風についての記述が示され、刀工を答えさせるものである。例を挙げれば、「刃長2尺3寸1分、反り7分強。鑄造、庵棟、身幅普通、重ね薄め、先反りやや高く、中切先。板目肌流れ（下線は筆者。以下同。）ごころに地沸つき、白気映りあり。刃文は互の目に丁子、耳形の刃が交じり、匂出来、小足入り、砂流しかかり、表裏の刃が揃い気味。帽子は乱れ込み、先小丸でわずかに返る。茎は生ぶ、先刃上がり栗尻、鍔

目は鷹の羽、指表棟寄りに5字銘。」という具合に出題される²²。

さて、この問題と古刀・五箇伝のうち美濃伝の作風(板目に柁ごころの交じるものが多く、白気ごころの映りが出る。刃文は直刃に互の目乱れが加わり、互の目の頭が尖り、直刃にも1ヶ所か2ヶ所に尖りごころの小互の目が交じる。匂出来のものが多く、三本杉、大湾れ乱れ、皆焼もある。帽は返りが刃先に寄って深い地蔵帽子や善定帽子になる²³)を照らし合わせると、同じ表現(下線部=鑑賞/鑑定用語)を見つけることができ、出題は美濃伝であると判断できるのである。(その他の情報からも総合的に考量して回答は「和泉守兼定」となる。)

こうした実物と典型的とされる作風の比較による鑑定は、実のところ「掬七割」といい、例外を経験でカバーする必要があるのだが、嘘のようによく当たる(乏しい経験ながら、筆者の実感では)。見巧者といわれる人たちは、実際の作例(日本刀の状態)と鑑賞用語を関連づけて会得した上で、刀剣を鑑賞/鑑定しているのだと思われる。「掬七割」という言葉を教えてくださったI氏によれば、「頭の中に(これらの見どころ=鑑賞用語を分類収納した)箱(抽斗)をいくつも作っておいて」鑑定に臨むといい、知識が多次元軸の脳内空間のデータベースに格納されている様が想像される。然様に鑑定虎の巻のごとく平面(二次元)の図表に収まり切れない複雑な知識体系なのである。従って青木氏著作でも異なる指標軸の複数の表で用語が整理分類されることになる。「刀の世界」の難しさの一端なりとも伝わっただろうか。

⑤ よい刀とは：地域研究における学術的価値

前々節で、現代日本刀は美術品であると述べた。材料・製法・形状の伝統性(真正性)をいわば強制され、一定の水準に達していなければ登録されないことも記した。そのためには、日本刀のよしあしを図る蓋然性の高い基準があり、それは多くの人が納得できる規範であるべきだが、その鑑賞美を体得した人は稀であることは前節で略述した。青木氏が例示したところでは、日本刀の帝展出品は第15回(1934)のみ、以降は工芸部門から排斥されたのは、精通した帝展審査員がいなかったからだ。

また、美術品である前に実用品(刃物)である日本刀の作り手(刀匠)は、殆どの人が切れ味にこだわって製作している。鑑賞美とともに、青木氏の重要な関心事である現代日本刀の実用性と創造性について触れつつ、本書の地域研究・学術的価値を強調したい。

最初に、岐阜県あるいは関市において刀剣研究が盛んであることは自明である。とくに関市では関伝日本刀鍛錬技術保存会を中心に資料の発掘や先人の顕彰が地道に続けられており、関市史に「刃物産業編」というユニー

クな巻を有するように、郷土史または産業史の分野では多くの業績²⁴がある。翻って、美術刀剣という観点では、五箇伝の一翼を担う美濃刀について、さまざまな専門書が刊行²⁵されてきた。これらは刀工研究、作品集に分類されるものである。つまり、先行研究は、いずれも生産者・発信者の目線に立ったものであったといえるだろう。

一方、本書は以上の先行研究が取りこぼしてきた受容者側の「鑑賞」を大きなテーマとし、論点にすらされてこなかった現代刀匠の「創造」にも切り込んだ前人未踏の書である。俯瞰すれば、明治以降の「美術」制度の枠組みを窺う論点も含んでいる。

現代日本刀にとって「よい刀」の基準を知るために、日本美術刀剣保存協会のコンクール「現代刀職展(旧・新作名刀展)」における岐阜県内刀匠の受賞状況(表1 新作名刀展/現代刀職展(日本美術刀剣保存協会)受賞一覧)を見てみよう。1995~2008年の期間に各賞表彰が相次いでいる。特筆すべきは尾川邦彦刀匠(兼國1925-2012)・光敏刀匠(兼國1953-)父子の無鑑査認定(兼國2006、兼國2009)である。無鑑査は、刀剣界では、国重要無形文化財保持者各個認定(人間国宝)の次に位置づけられる名工とされるポジションだ。両刀匠の技術と作品の鑑賞美が広く認められた証といってよい。但し、尾川刀匠の作風は二人とも美濃伝ではない。華麗な濤乱刃で名高い大坂新刀の津田越前守助広に倣っている。これには、美濃伝狙い(模倣)では、実は、受賞が難しいという事情がある。他の高位受賞者も、相州伝や備前伝を目標としている²⁶が実態である。

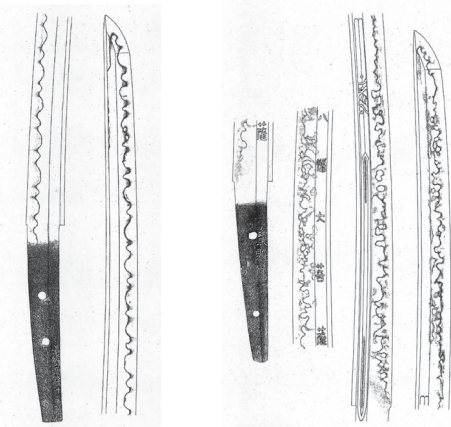


写真3 押形(個人蔵・紙谷治宏押形作成)

左：脇指 銘 濃州赤坂住千手院作

右：刀 銘 兼則作

一例を挙げよう。写真3を見比べると、質実(左)と絢爛(右)という作風の違いが一目瞭然されるだろう。大量生産の実用品(例えば、日明貿易の東刀)という産地の歴史的経緯から、美濃刀が見た目重視の美術刀剣としてアピールしにくいことは残念ながら否定できない。

しかし、もちろん、美濃刀にも古来「よい刀」とされる名刀はあるし、美濃刀に倣って評価の高い現代刀もある。

ところで、「美術刀剣類」には法的定義がある。即ち、銃砲刀剣類所持等取締法に「美術品として価値ある刀剣類」を登録する（第14条）とし、登録規則（鑑定基準）に「姿、鍛え、刃文、彫り物等に美しさが認められ、又は各派の伝統的特色が明らかに示されているもの」がそれである。結局、現代刀であっても、鑑賞／鑑定用語で語られる作風を有し、従来通りの形状・刃文でなければ登録できない。現代刀匠は、原料・製法や製作本数の制約に加え、創造性をも制限されているのが現状なのである。

おわりに

本稿は青木氏の示した刀剣研究の今後について展望して終りたいと思う。

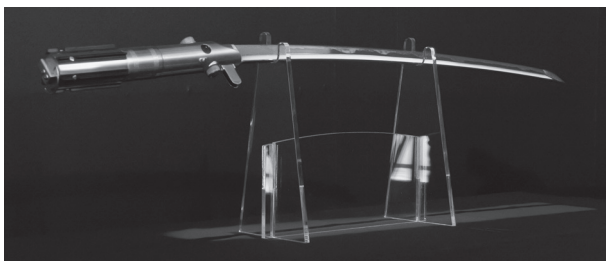


写真4 来入勢刃（ライトセイバー）
二十五代・二十六代藤原兼房共作（関鍛冶伝承館蔵・関市写真提供）

写真4は、映画「スター・ウォーズ」に触発されて現代刀匠が製作した「日本刀」である。近年、アニメやゲームなど、若者文化と日本刀のコラボ企画が盛んに行われ、先駆館として知られる備前長船刀剣博物館の一連の事業（2011「戦国BASARA」HERO武器・武具列伝、2012エヴァンゲリオンと日本刀展、2013二次元VS日本刀展、2014戦国無双の刀剣展、2015真剣少女の日本刀展）の中でも、「エヴァンゲリオンと日本刀展」は、2012～2019年に全国24館を巡回²⁷するヒットとなっている。企画者のひとりであった植野哲也氏によれば、エヴァ展出品作の中には「伝統的ではない」ため登録不合格となりかけたものもあったという。室町時代の長柄武器に類例（筑紫薙刀）を探して、からくも登録できた²⁸と聞く。この作品については本書でも言及があり、刀匠が登録を念頭に作刀したという証言が記録されている。とはいえ、必ずしも伝統に拘泥しない審査に道を開く見逃せない変化であった。2015年以降のサブカルチャー発祥の日本刀ブームを追い風に、現代刀匠の創造力が発揮される機会が増えれば、硬直的な鑑賞美観の変容もあり得るのではないだろうか。

青木氏が苦心惨憺した鑑賞／鑑定については、先述し

た脳内データベースを実現するシソーラス構築の試み²⁹が見られる。出品する刀匠に注目した本書の立場を転じれば、昨今、急増した博物館・美術館における刀剣展について、従来型の展示メソッドでは対応できない日本刀展示を考察する論考³⁰も散見される。『現代日本刀の生成』が切り開いた諸論点について、漸く世間が追い付いてきたように感じる。本書の撒いた種が芽吹き、確かな実りもたらされるかは残された我々にかかっている。

本稿執筆にあたりシンポジウム主催・登壇者の皆様、刀剣勉強会の皆様にはたいへんお世話になりました。末尾ながら記して深謝申し上げます。

¹ 足利市立美術館「今、超克のとき。山姥切国広 いざ、足利。」（2018年3月4日～4月4日）は山姥切国広を展示して37,820人が来場（2018年視察資料より）。徳川美術館では鯉尾藤四郎を所蔵品展示に出品して、2015年度の来館者数が2013年度の来館18万人から25万人に急増した（平成29年度岐阜県博物館協会 第93回研修会「広報戦略を考える 自館の強みを見直す 徳川美術館の事例を中心に」における発表より）。

² 近代日本における「美術」制度導入については、佐藤道信『＜日本美術＞誕生』（講談社 1996）、佐藤道信『明治国家と近代美術』（吉川弘文館 北澤憲明『眼の神殿』（ブリュッケ 2010）、北澤憲明『美術の日本近代史』（東京美術 2014）などを参照。

³ 日本刀は「刀匠」しか製作できない。「刀匠」とするには、「刀匠」資格を有する刀鍛冶の下で5年以上の修業をし、文化庁の「美術刀剣刀匠技術保存研修会」を修了しなければならない。なおかつ、事前承認制により年間の作刀本数が制限されている。

⁴ 広報チラシより。シンポジウムの概要は次の通り。タイトル：公開シンポジウム「現代日本刀の生成—刀都・関の刀の世界」、主催：青木啓将さんの博論出版を期する会／名古屋大学人文学研究科・文学部文化人類学研究室、共催：中部地区研究懇談会（中部人類学談話会）、日時：2019年11月30日（土）13:30～17:00、会場：名古屋大学文系総合館・カンファレンスホール

⁵ 時間の都合で、予定されていた質疑応答・総合討論（佐々木重洋、余語琢磨・早稲田大学）は省略された。

⁶ 井戸誠嗣、土岐邦彦、尾川光敏（刀匠名：兼國）、丹羽清吾（刀匠名：兼信）、奥田光雄

⁷ 2020年1月19日現在、12冊の蔵書があり、うち1冊が貸出中。

⁸ 総務省統計局ホームページより。

<https://www.stat.go.jp/data/kokusei/topics/topi102.html>

(2020年1月19日閲覧)

⁹ 関市ホームページより。

<http://www.city.seki.lg.jp/0000004799.html> (2020年1月19日閲覧)

¹⁰ Wikipedia「日本の市の人口順位」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E5%B8%82%E3%81%AE%E4%BA%BA%E5%8F%A3%E9%A0%86%E4%BD%8D> (2020年1月19日閲覧)

「日本の市の面積一覧」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E5%B8%82%E3%81%AE%E9%9D%A2%E7%A9%8D%E4%B8%80%E8%A6%A7> (2020年1月19日閲覧)

¹¹ スリーエス。いずれも世界的刃物産地であるイギリスのシェフィールド、ドイツのゾーリングと関市を指す。

¹² 関市産業経済部商工課・関市長公室行政情報課『平成30年度 関市の工業』によれば、出荷額に占める岐阜県(関市)の全国シェアは以下の通りでいずれも全国一位。包丁; 55.4% (47.1%)、ナイフ類; 59.6% (46.7%)、鋏(理髪用除く); 30.7% (29.0%)、理髪用刃物; 83.0% (72.3%)、その他利器工器具=爪切り等; 62.4% (51.0%)

¹³ 以下、関市の刃物産業についての記述は、関市教育委員会『新修関市史 刃物産業編』(関市、1999)による。

¹⁴ 昭和19年(1944)関刃物工業組合に届出のあった刀工は233人、未登録を含めると265人。関鍛冶伝承館「企画展 近現代刀匠列伝 魔刀令以降の刀匠たち」パンフレット(2004)、岐阜県博物館『伝統と創造 岐阜県重要無形文化財のわざと美』図録(2016)を参照。

¹⁵ 『伝統と創造 岐阜県重要無形文化財のわざと美』(岐阜県博物館2016)より。なお、井戸誠嗣氏によると、2020年1月現在の関伝日本刀鍛錬技術保存会会員の刀匠は10人(元会員4人)である。

¹⁶ ()内にある通り、未所属の刀匠も相当数いるが、文化庁認定の刀匠の総数は公開されていないため便宜的に用いる。また、2020年現在、全日本刀匠会180人中、県内9人(関4人、富加3人、山県1人、羽島1人)が所属、全体に占める割合は約5%に減。

¹⁷ 第二次世界大戦後、GHQによって武器として接収され、平成11年(1999)、日本国に返還された所有者不明の日本刀。全国の公立博物館等に譲渡された。

¹⁸ 岡山県立博物館『日本刀 赤羽刀と備前の名刀』(同館2008)

¹⁹ 他に、反りのない直刀、両刃の剣、槍・薙刀、鏃等もある。

²⁰ 「定」異体字

²¹ 茎には銘のほか形態(茎仕立て、茎尻)、鏝目など、作者を特定する多くの情報がある。

²² 『刀剣春秋』785号(2017年11月)「刀剣鑑定教室」より、適宜表記を改めた。回答は786号(12月)に掲載。

²³ 得能一男『刀剣見どころ勘どころ』(光芸出版1976)より、適宜省略して引いた。

²⁴ 井戸誠嗣監修『関伝日本刀鍛錬技術保存会45周年記念誌』(関伝日本刀鍛錬技術保存会2016)、『伸びゆくまち関市(副読本)』(関市教育委員会2015)、『新修関市史刃物産業編』(関市教育委員会1999)、関鍛冶刀祖調査会『関鍛冶の起源をさぐる』(関市1995)、『美濃伝(関伝)日本刀鍛錬』(関市[1988])、日本輸出刃物工業組合『関の刃物の歴史』(日本輸出刃物工業組合1984)、山田英『日本刀関七流』(中央刀剣会1970)、中島光洋『濃州関の日本刀』([岐阜県師範学校]1941)、篠原一郎『濃州関伝』(濃州日本刀鍛錬所1939)、小石修一『日本刀と本校の教育』(武儀郡関東尋常小学校1935)

²⁵ 『兼定と兼元：戦国時代の美濃刀』(兼定と兼元展実行委員会・岐阜市歴史博物館2008)、杉浦良幸『美濃刀工銘鑑』(里文出版2008)、鈴木卓夫『室町期美濃刀工の研究』(里文出版2006)、『関伝美濃伝名刀展 関伝現代刀剣展』(関市1990)、『大和・美濃刀工展：日本名刀展シリーズ』(致道博物館1978)、加納友道『美濃刀押形集』(日本春霞刀剣会岐阜県支部1977)、得能一男『美濃刀大鑑』(刀剣研究連合会・大塚巧芸社1975)、『美濃刀匠銘鑑』(日本美術刀剣保存協会岐阜県支部1964)

²⁶ 『伝統と創造 岐阜県重要無形文化財のわざと美』(岐阜県博物館2016)

²⁷ Wikipedia「エヴァンゲリオンと日本刀展」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B1%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%B3%E3%82%B2%E3%83%A4%E3%83%B2%E3%83%B3%E3%81%A8%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%88%80%E5%B1%95> (2020年1月23日閲覧)

²⁸ 『芸術新潮』66巻9号(2015年9月)。また、2018年3月11日、岐阜県博物館での博物館学芸講座「備前伝と美濃伝 日本刀五ヶ伝について」(講師：植野哲也)における講話でも言及があった。

²⁹ 福田博同「日本刀鑑定用語：どうコミュニケーションしてきたか」(『コミュニケーション文化』11号、2017年3月)

³⁰ 久保恭子「刀剣博物館LED照明導入への軌跡」(『照明学会誌』101巻12号、2017年12月)、井本悠紀「日本刀展示に於けるLED照明の問題点について」(『國學院雑誌』115巻8号、2014年8月)、大竹弘高「日本刀展示の研究(序論)：現状と課題」(『國學院大學博物館學紀要』33号、2008)

表1 新作名刀展／現代刀職展（日本美術刀剣保存協会）受賞一覧

※2018～現代刀職展に名称変更

作刀の部：太刀・刀・脇指・薙刀・槍の部

短刀・剣の部

年	回	無鑑査	高松宮賞	文化庁長官賞	日本美術刀剣保存協会名誉会長賞	日本美術刀剣保存協会会長賞	薫山賞	寒山賞	全日本刀匠会会長賞	全日本刀匠会理事賞	優秀賞	努力賞	入選	入選（入賞）	
令和1 2019	55	尾川光敏										加藤賢津雄、 吉田政也		高羽弘宗・ 岡本克博（努力賞）	
平成30 2018	54						加藤賢津雄						岡本克博、高羽弘、 吉田政也		
平成29 2017	53	尾川光敏											吉田政也	高羽博（努力賞）、 岡本克博	
平成28 2016	52	尾川光敏										加藤賢津雄、 加藤正文夫	伊佐地督、小島郁夫、 高羽弘、丹羽清吾、 吉田政也		
平成27 2015	51	尾川光敏											岡本克博、吉田政也	岡本克博、高羽弘	
平成26 2014	50											高羽弘	岡本克博		
平成25 2013	49	尾川光敏											高羽弘		
平成24 2012	48	尾川邦彦、 尾川光敏													
平成23 2011	47	尾川邦彦、 尾川光敏										高羽弘			
平成22 2010	46	尾川邦彦、 尾川光敏											伊佐地督		
平成21 2009	45	尾川邦彦									尾川光敏		高羽弘、岡本克博、 伊佐地督	吉田研	
平成20 2008	44	尾川邦彦										高羽弘	小島郁夫、加藤正文夫、 吉田研、伊佐地督、 吉田政也		
平成19 2007	43	尾川邦彦						尾川光敏				加藤賢津雄、 高羽弘、加藤正文夫	加藤孝雄、小島郁夫、 浅野太郎、伊佐地督、 吉田研、丹羽清吾、 吉田政也	加藤賢津雄、吉田政也	
平成18 2006	42	尾川邦彦									加藤孝雄、 尾川光敏、小島郁夫		加藤賢津雄、高羽弘、 吉田研、伊佐地督、 岡本克博	丹羽清吾	
平成17 2005	41				尾川光敏	加藤賢津雄	尾川邦彦				高羽弘	加藤孝雄	小島郁夫、浅野太郎、 伊佐地督	吉田研、丹羽清吾、 亀井昭平	
平成16 2004	40	尾川光敏					尾川邦彦					加藤孝雄	加藤賢津雄		
平成15 2003	39				尾川邦彦	尾川光敏						加藤孝雄	高羽弘、加藤賢津雄、 吉田研、亀井昭平		
平成14 2002	38		尾川光敏				尾川邦彦					加藤孝雄	加藤賢津雄、 高羽弘	小島郁夫、亀井昭平、 伊佐地督、吉田研	加藤賢津雄、高羽弘、 吉田研
平成13 2001	37						尾川邦彦					高羽弘、小島郁夫	加藤孝雄	尾川光敏、加藤賢津雄、 亀井昭平、伊佐地督、 吉田研	加藤孝雄（努力賞）、 高羽弘、吉田研
平成12 2000	36										尾川邦彦、 尾川光敏、高羽弘、 加藤孝雄	小島郁夫	亀井昭平、加藤賢津雄、 吉田研、下島宙、 丹羽清吾、伊佐地督		
平成11 1999	35			尾川邦彦			尾川光敏			高羽弘	加藤賢津雄	小島郁夫	加藤孝雄、亀井昭平、 吉田研、伊佐地督	吉田研、亀井昭平、 加藤孝雄	
平成10 1998	34						尾川邦彦					尾川光敏	加藤賢津雄、 加藤孝雄	小島郁夫、高羽弘、 吉田研、亀井昭平、 伊佐地督	丹羽清吾、吉田研、 高羽弘
平成9 1997	33	尾川邦彦	尾川光敏										加藤賢津雄	亀井昭平、高羽弘、 小島郁夫、加藤孝雄、 伊佐地督、丹羽清吾	亀井昭平、吉田研
平成8 1996	32										尾川光敏、 尾川邦彦		加藤賢津雄、小島郁夫、 加藤孝雄、小島寛二、 吉田研、伊佐地督、 高羽弘、後藤良三、 亀井昭平、丹羽清吾	亀井昭平	
平成7 1995	31										尾川光敏	尾川邦彦	小島郁夫、加藤孝雄、 加藤賢津雄、高羽弘、 伊佐地督、後藤良三、 吉田研、丹羽清吾、 小島寛二、亀井昭平	吉田研	
平成6 1994	30											尾川光敏	加藤孝雄、小島郁夫、 加藤賢津雄、亀井昭平、 尾川邦彦、高羽弘、 後藤良三、伊佐地督、 松原龍平、小島寛二、 中田勝郎、吉田研	吉田研	
平成5 1993	29												加藤孝雄、小島郁夫	尾川邦彦、尾川光敏、 加藤賢津雄、後藤良三、 高羽弘、亀井昭平、 吉田研、松原龍平、 丹羽清吾、小島寛二、 中田勝郎	
平成4 1992	28												加藤賢津雄	小島郁夫、尾川邦彦、 加藤孝雄、尾川光敏、 高羽弘、後藤良三、 亀井昭平、小島寛二、 伊佐地督、吉田研、 丹羽清吾	
平成3 1991	27												加藤孝雄	高羽弘、尾川邦彦、 亀井昭平、丹羽清吾、 伊佐地督、松原龍平、 吉田研、後藤良三、 中田勝郎	
平成2 1990	26												加藤孝雄	加藤賢津雄、尾川邦彦、 小島寛二、亀井昭平、 松原龍平、中田勝郎、 高羽弘、伊佐地督、 丹羽清吾、吉田研	
平成1 1989	25													加藤孝雄、亀井昭平、 小島寛二、加藤賢津雄、 小島郁夫、尾川邦彦、 高羽弘、後藤良三、 松原龍平、吉田研、 大野正巳、丹羽清吾、 伊佐地督	

以下より作成

全日本刀匠会 HP 新作刀展覧会受賞履歴 <http://www.tousyoukai.jp/rireki/>

日本美術刀剣保存協会「刀剣美術」

(別表) 天正 11 年 8 月 1 日に羽柴秀吉が発給した領知宛行状等一覧

番号	宛先	石高	場所	備考
1	杉原七郎左衛門尉(家次)	32,100	江州志賀郡内、高島郡内、神崎郡内	
2	杉原七郎左衛門尉(家次)	20,660	江州志賀郡内	台所入目録＝蔵入地代官
3	浅野弥兵衛尉(長吉)	20,300	江州下甲賀、栗本郡内	
4	山崎源太左衛門尉(片家)	14,000	江州愛智郡内、野洲郡内、犬上郡内	
5	一柳市助(直末)	11,925	上山城、河州若江郡内	台所入目録＝蔵入地代官
6	一柳市助(直末)	6,200	山城国内、丹波国何鹿郡内	
7	福島市松(正則)	5,000	江州栗太郡内、河州八上郡内	
8	賀須屋助右衛門(真雄)	3,000	播州賀古郡内、河州河内郡内	
9	加藤虎介(清正)	3,000	江州栗太郡内、上山城、河州讚良郡内	
10	加藤孫六(嘉明)	3,000	播州明石内、上山城内、江州栗太郡内、河州八上郡内	
11	萱生左大夫	3,000	石田弥三(正澄)代官内	判物
12	久徳左近兵衛尉	3,000	江州犬上郡内	
13	船越左衛門尉(景直)	2,400	河州丹南郡内	
14	今井宗久	2,200	摂州欠郡内	
15	津田小八郎	2,000	播州揖東郡内、摂州矢田部郡内	
16	津田与三郎(重久)	1,200	江州野洲郡内、大方郡(河内国大泉郡力)内	
17	片桐加兵衛(貞隆)	1,034	播州揖東郡内、上山城相楽内、河州交野郡内	
18	小出小才次(吉政)	1,000	河州高安郡	
19	伊東民部大輔(祐兵)	500	河州丹南郡内	
20	黒田吉兵衛(長政)	450	河州丹北郡内	
21	野村内匠	407	河州丹北郡内	
22	福谷藤介	400	江州神崎郡内	
23	水野久右衛門尉	400	摂州菟原郡内	
24	山内伊右衛門尉(一豊)	361	河州交野郡内	
25	今枝勘右衛門尉	340	河州古市郡内	
26	野瀬右衛門尉	285	河州高安郡	
27	上部太夫(貞永)	250	丹州船井郡内	
28	森村左衛門尉	240	丹州桑田郡内	
29	磯村忠右衛門	220	江州浅井郡内、神崎郡内	
30	竹田法印(定加)	200	城州内	
31	東玉入道(新庄直忠)	200	江州浅井郡内	
32	中屋左近兵衛尉	200	江州浅井郡内、神崎郡内	
33	小椋鍋	182	江州愛智郡内	信長側室
34	河副式部(正俊)	160	江州神崎郡内	
35	夫間勝兵衛	133	河州丹北郡内	
36	(近江)観音寺	118	江州栗本郡内	
37	伝宝長介	80	河州更(讚)良郡内	
38	不明	71	江州蒲生郡内	
39	三休	50	江州浅井郡内	
40	橋本公文	20	石田正澄代官内	判物

名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集四』(吉川弘文館・二〇一八)より作成

5 中野等『太閤検地 秀吉が目指した国のかたち』（中公新書・二〇一九）

6 天正一三年（一五八五）羽柴秀吉は、近衛前久の猶子となり藤原に改姓して
関白となり、さらに新姓の創出を申請し、「天下長久万民快樂」の意を込めて
豊臣と改姓した。そのため、今回の二通は、その前後で発給者を羽柴秀吉、
豊臣秀吉とした。羽柴は名字であり、豊臣は本姓であるが慣例に従った。

合参千石

天正拾老年八月朔日秀吉(花押)

加藤孫六殿

(1) 文書の内容

天正一一年(一五八三)八月一日付けで加藤嘉明に宛てられた知行目録。同年四月の賤ヶ岳の戦いでの嘉明の活躍に対して知行(領地)が与えられた知行宛行状とともに出されたものである。これによれば、嘉明は播磨国明石内(兵庫県明石市)にて三百石、山城国内(京都府)にて二百石、近江国栗太(田)内矢島(滋賀県守山市)にて二〇四〇石、河内国八上郡内中村郷(大阪府堺市)にて五五四石の三〇九四石が与えられた。その後天正一四年(一五八六)淡路志智一万五千石、文禄四(一五九五)伊予松前六万石を与えられた。関ヶ原合戦にも参加し二〇万石に加増、寛永四年(一六二七)には会津四〇万石の大名となった。この資料は加藤嘉明が武将としての第一歩が記されたものである。その際発給された知行宛行状(大阪城天守閣蔵)は次のとおりである。

(参考資料一)

加藤孫六宛領知宛行状

江州・城州・河州・播州於四ヶ国之内所々、都合三千石事、

目録別紙相添、令扶助畢、永代全可領知之状如件、

天正拾一

八月朔日 秀吉(花押)

か藤孫六殿

ここからも加藤嘉明がこの時、畿内・近国に四ヶ所の領地を与えられたことがわかる。

(2) 天正一一年八月一日付知行宛行について

(別表) 天正一一年八月一日に羽柴秀吉が発給した領知宛行状等一覽(5頁)の
とおり、天正一一年八月一日には、秀吉によって多くの知行宛行状が発給されてい
る。石高の多い順にみると、杉原家次(三二一〇〇石+蔵入地二〇六六〇石分の代
官)、浅野長吉(二〇三〇〇石)と秀吉と姻戚関係にある一族への宛行がみられる。
次に近江の山崎片家(一四〇〇〇石)、美濃出身の一柳直末(六二〇〇石+蔵入地一
九二五石分の代官)が続く。そして、その後、秀吉の従弟とされる福島正則(五
〇〇〇石)、同じく親類とされる加藤清正(三〇〇〇石)の他、糟屋武則(三〇〇〇
石)、加藤嘉明(三〇〇〇石)といった、いわゆる賤ヶ岳の七本槍と称された面々が
続く。

これらの領知目録のなかには、「村」がみられず、郡内と記されるもの、地名のみ
や郷といった様々な表記がなされている。これは当時実施された太閤検地について
は、まず領域の確定がおこなわれ、在地から申告された差出を修正するかたちで行
なわれたことに基づいたものと考えられている。

今回は、羽柴秀吉が権力を確立していく上で画期となった賤ヶ岳の合戦・小田原
北条氏攻め後、領地支配を整理する過程で発給された当館の購入文書二通について
紹介した。

(補注)

- 1 池田輝政については、岐阜県博物館『信長・秀吉・家康と美濃池田家―大御乳・池田恒興・輝政の戦い―』(岐阜県・二〇一八)を参照のこと。
- 2 名古屋博物館編『豊臣秀吉文書集四』(吉川弘文館・二〇一八)
- 3 静岡県編『静岡県史料』第五輯(静岡県・一九四二)、豊橋市史編集委員会『豊橋市史』第一巻(豊橋市・一九七三)、愛知県史編さん委員会編『愛知県史』通史編3・中世2織豊(愛知県・二〇一八)
- 4 鳥取市歴史博物館『因幡×豊臣―豊臣政権と因幡の大名―』(二〇一九)によれば、宮部の奉行人としての役割は、押し並べて大名に誓約させたり、処罰に関する規定を出すなど、個々の大名との交渉ではなく、広く諸大名に対して制限や規制を与える際に政務の表側に出てくる傾向にあるとされる。

の領域については、次に紹介する資料のように新居の渡船管理など遠江国にも一部入り込んだ支配が指摘されている³⁾。

(参考資料二)

遠州今切新居渡船之事、往還晝夜無油断可通用。自余之渡不准故、屋敷拾町式段遣之、

并諸役以下令免許者也。

文禄四年十二月廿二日

照政(花押)

守舟中

今回購入した書状は、そうした指摘の端緒を記したものと位置づけることができ、興味深いものである。

(2) 宮部継潤とは

ここでこの差配を扱った宮部中務卿法印(継潤)の略歴をみておく。

宮部継潤は、近江国浅井郡宮部の出身。浅井長政に仕えたが、元龜三年(一五七二)羽柴秀吉の調略に応ずるとともに、秀吉の甥を養子(宮部吉継・後の羽柴秀次)としている。その後、秀吉の与力として中国攻めに従い、但馬方面の攻略に貢献。天正八年(一五八〇)には、但馬豊岡城主となった。その後も秀吉のもと山陰方面の対毛利前線で活躍し、翌九年(一五八一)吉川経家が降伏した後、鳥取城代となった。本能寺の変後には、正式に鳥取城主となり、五万九七一石(うち但馬国二方郡七三七二石)を領した。その後も、九州攻めや小田原北条氏の攻略といった秀吉の全国統一に従った。経済分野で優れた能力を発揮し、先述の小田原仕置き後の、三河国検地では中心的な役割を果たし、文禄二年(一五九三)には、大友義統改易後の豊後国の検地を山口宗弘と共に担当した。また同年、因幡巨濃郡に因幡銀山を開き、一時は但馬生野銀山に次ぐ銀の産出をみている。慶長元年(一五九六)嫡子長房(長熙)に家督を譲ったがその後も秀吉の御伽衆を務めつつ、政務にも関わった。慶長四年(一五九九)閏三月、前年八月に亡くなった秀吉のあとを追うように亡くなった。

このように宮部継潤は、羽柴秀吉配下の武将として山陰戦線で軍功を挙げた後、

豊臣氏の奉行人の一人として活躍した。その一例として文禄四年七月二十付織田信雄他血判起請文があげられる。この起請文は、豊臣秀次が高野山で切腹した五日後に、秀吉が常真(織田信雄)、羽柴筑前中納言(秀俊)、羽柴江戸中納言(徳川秀忠)など都合三十名の諸大名に対して、おひろい様に対する忠節と秀吉の決めた法度を守ることを誓約させている。その宛所には、宮部中務卿法印・民部卿法印(前田玄以)・富田左近将監(二白)・増田右衛門尉(長盛)・石田治部少輔(三成)・長束大蔵太輔(正家)の順で記されており、筆頭に宮部継潤の名前が記されているのが目を引く。また同日付の前田利家血判起請文は、宮部中務卿法印・民部卿法印・富田左近将監・長束大蔵太輔・石田治部少輔・増田右衛門尉の順で宛てられており、やはり同じく宛所の筆頭で記されている。豊臣政権の奉行人は、政権末期いわゆる五奉行とされる面々の印象が強いが、その前段階において、継潤は大きな役割を果たした⁴⁾。

それでは、何故継潤の姿が歴史上希薄なのであろうか、第一に宮部自身、生年ははっきりしないが、豊臣政権内の吏僚としては高齢で活躍の場が減少していったこと、第二に嗣子長房は、慶長五年(一六〇〇)徳川家康の会津攻めに最初参加するも家中をまとめられず、自身西軍への与同が疑われる行動をとったため岡崎城に押し込められている。その後、田中吉政らの取成しも不調に終わり、関ヶ原合戦後に改易された。このように、継潤没後僅か一年余りで大名家としての宮部家は立ち行かなくなったことも、宮部継潤の姿が見えにくくなっていることの一因といえよう。

2 羽柴秀吉知行目録

三一・七 × 五〇cm (裏打有 未表装)

知行分所々目録事

一 参百石 播州明石内

一 式百石 上山城内

一 式千四拾石江州栗太内

矢嶋

一 五百五拾四石河州八上郡内

中村郷

購入資料紹介 秀吉文書について

山田 昭彦

Introduction of purchase historical sources

— A Focus on Hideyoshi monjo (Hideyoshi documents) —

YAMADA Akihiko

本稿では、平成三〇年(二〇一八)度に岐阜県博物館が購入した秀吉関連資料二点について、次の通り紹介する。

1 豊臣秀吉朱印状 四四・三 × 六四・二cm 原装 (裏打無 未表装)

従今切西二在之

遠州内八千石人夫事

吉田城付之内二相加

岐阜侍従二可相渡由

宮部中務卿法印方へ

被仰出候て切かた宮部

法印次第二可引渡候

然者今切川原二在之

三千石人夫返旨御代官

可仕候也

八月廿九日(朱印)

木全又左衛門とのへ

瀧川彦二郎とのへ

(1) 文書の内容

天正一八年(一五九〇)八月二十九日付けで家臣木全又左衛門(忠澄)とその子瀧川彦二郎(忠征・後の尾張徳川家家老)に宛てた朱印状。今切より西にある遠江国内八千石分の人夫については、吉田城付けに加えて岐阜侍従(池田輝政)に渡すように宮部中務卿法印(宮部継潤)へ伝えました。宮部の指示に従い引き渡すようにしてください。従って今切川原にある三千石分の人夫については御代官へ返すようにしてくださいとある。

小田原北条氏降伏に伴う家康の関東転封によって、家康の旧領には豊臣配下の大名が入封した。駿河国では、中村一氏が駿府城に入り、遠江国では、懸川城に山内一豊、浜松城に堀尾吉晴が入った。三河国では、田中吉政が岡崎城主となり、岐阜城主であった池田輝政が三河吉田(豊橋)城主となった。この書状はその際にとられた秀吉による輝政の人的支配に関する処遇が記されたもので、輝政が岐阜から三河吉田へ移封する時期の動向が窺える資料である。

また、同月二五日付の同名宛文書には次のようである。

(参考資料一)

木全又左衛門尉他宛朱印状²⁾

「木俣碩雄氏所蔵文書」

遠州内西海州八千八百八十七石并東海州三千三百五十石、都合壹万貳千貳百三拾七石事、為御蔵入御代官被仰付候条、令取沙汰可運上候也、

天正十八

八月廿五日(朱印)

木全又左衛門尉とのへ

瀧川彦二郎とのへ

ここには、今切を挟んだ東海州(三三五〇石)西海州(八八八七石)合わせて二二三七石については、蔵入地として代官が管理する旨が命じられている。従って同地は、豊臣政権の蔵入地とされるが、四日後の二十九日付秀吉朱印状には西海州分の人夫については輝政の支配に付け加えられたことがわかる。これまでも、池田氏

岐阜県博物館調査研究報告 第40号

令和2年3月31日 発行

編集・発行 岐阜県博物館
関市小屋名1989 (岐阜県百年公園内)
TEL 0575-28-3111

印刷 株式会社 大一プリント

